

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	出口 優木
論文題目	フランス語の連想照応のメカニズム		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、フランス語の連想照応のメカニズムを多角的に解明しようとしたものである。連想照応とは <i>J'ai acheté un stylo, mais j'ai déjà cassé la plume.</i> 「私は万年筆を買ったが、もうペン先を折ってしまった」という例で、<i>un stylo</i> (万年筆)と<i>la plume</i> (ペン先)の間に成り立つ照応関係をいう。従来 of 言語学や心理学では間接照応とか橋渡し推論 (<i>bridging inference</i>) と呼ばれることもある。</p> <p>第一章では、連想照応を分析する際のアプローチとして従来から行われてきた、語彙の意味によるステレオタイプを重視する立場と、談話的あるいは認知的な解釈を重視する立場の得失を考察し、基本的には前者の立場が有効であることを示している。前者の立場では、語彙が文化・社会的に喚起するフレームに基づくステレオタイプが連想照応成立の基盤であるとされる。本論文では連想照応の多くの作例をインフォーマント調査した結果に基づいて、連想照応の定義をフレームに基づくものに限定するほうが、より一貫した説明が可能であることを示している。しかしその際に喚起されるフレームは固定的なものではなく、先行詞や照応詞のホスト文が表す意味によって変化するものであり、従来考えられていたよりも可變的に捉えなくてはならないとしている。</p> <p>第二章では身体部位と抽象名詞による連想照応の問題を論じている。従来から身体部位は、人間とその部位という「全体・部分」関係が成り立つにもかかわらず、連想照応できないことが知られており、その理由を解明することが課題となっていた。本論文では、代表的な仮説として <i>Kleiber (1999)</i> が提示した「分離可能性」(部分が全体と独立して存在しうる)と「存在論的同一性」(先行詞と照応詞が存在論的に同一カテゴリーに属してはならない)という仮説を検証し、基本的にはこの仮説が正しいことを示している。ただし、身体部位が関わる連想照応の実例調査では、従来言われてきたほどは容認度が低くはないこと、またインフォーマントによって容認度の判定が大きく異なることを明らかにしている。身体部位と抽象名詞による連想照応の分析から浮上したのは、連想照応の適否を左右する大きな要因として、語りの文脈においてあたかも登場人物が見ているかのように情景を描く「描写性」と、<i>Gérard Genette</i>が提唱した「内的焦点化」が働いているということである。連想照応は日常会話というよりも、小説などの語りの文脈においてよく用いられ、小説の一場面という限定を与えた方が容認度が高い。本論文ではそれを「描写性」の問題として捉え、連想照応の大きな特徴としている。</p> <p>第三章では、第二章での考察を踏まえ、それを発展させて、連想照応における時間の問題を論じている。まず連想照応を、「万年筆」と「ペン先」のようにフレームに基づくステレオタイプによるもの、「村」と「教会」のように場所的關係に基づくもの、「切る」と「ナイフ」のように項關係に基づくもの、「小説」と「著者」のように機能的關係に基づくものに分類し、ステレオタイプ型と項關係型では先行詞を含む文と照応詞を含む文とが、別々の時間に起きた別の出来事を語っていても連想照応は成立するが、場所的關係と機能的關係では成立しにくくなることを明らかにしている。前者のグループでは時間に左右されない安定的關係が先行詞と照応詞の間に存在するが、後者のグループはそうではなく、同時的な場面でなければならず、時間が大きな要因として働く。ここから本論文では、認知的フレームは連想照応の必要条件ではあるが十分条件ではなく、連想照応の成立には時間という要因が重要であり、連想照応の中には、先行詞を含む文と照応詞を含む文が</p>			

同時的で時間の経過がない場面を描いていることを必要とするタイプがあることを明らかにしている。

第四章では連想照応と密接に関係する直後の受け直しのパラドックスを論じている。直後の受け直しのパラドックスと呼ばれているのは、*Il y avait un homme. L'homme...* 「男がいた。男は…」のように、先行文で導入された不定名詞句を直後の文で定名詞句で照応することが難しいという現象である。本論文では代表的な先行研究であるCorblin (1983)の対比説、春木 (1986) の指示対象確立説、井元 (1989) の「発話内世界での位置づけ説」を比較検討し、前章までで得られた連想照応に関する知見に基づいて、従来の分析に修正を加えている。すなわち先行研究で分析されてきた例文においても、Corblinの言う対比、春木の指示対象の確立、井元の発話内世界での位置づけに加えて、時間という要因が大きな役割を果たしており、直後の受け直しのパラドックスにおいてもまた、先行詞を含む文と照応詞を含む文とが同一時間を共有していることが容認度を大きく左右することを、豊富な実例を用いて明らかにしている。

最後に結論において本論文で明らかにしたことをまとめ、今後の展望を示している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、従来からフランス語学において頻繁に論じられ、また一般言語学や心理言語学において「間接照応」「橋渡し推論」としても知られている連想照応を多角的に論じ、そのメカニズムを解明しようとしたものである。

連想照応の問題点のひとつは、どこまでを連想照応と認定するかという基本的問題において合意が得られていないことにある。典型的な連想照応の例 *J'ai acheté un stylo, mais j'ai déjà cassé la plume.* 「私は万年筆を買ったが、もうペン先を折ってしまった」では、*un stylo* (万年筆)と*la plume* (ペン先)の間に「全体」と「部分」という関係が成立し、それは我々が持つ文化・社会的知識に基づくフレームに支えられているとされる。このような例のみを連想照応と認めるとするのが語彙的なステレオタイプを重視する立場である。一方*Sophie dormait. Le journal était tombé au pied du lit, le cendrier était plein.* 「ソフィーは眠っていた。新聞はベッドの足元に落ちていて、灰皿は一杯だった」という文で *le journal* (新聞)や *le cendrier* (灰皿)もまた連想照応に含める立場があり、こちらは語彙に基づく意味関係よりも、談話の流れや聞き手の認知的解釈を重視する。本論文では多くの例文の分析に基づいて、基本的には前者のステレオタイプを重んじる立場を支持している。その大きな理由は、後者の立場に立つと連想照応を明確に定義できないことである。しかし前者の立場に対しても、フレームが決して固定的ではなく、文脈・状況に応じて変化する可変的なものであるという修正を加えている。この点はややもすればステレオタイプだけが重視される傾向がある従来の研究に対する有効な批判・修正となっている。

本論文の最も大きな主張は、「万年筆」と「ペン先」のようなフレームは、連想照応の必要条件ではあるが十分条件ではなく、連想照応の適格性を左右する大きな要因が「時間」であるという点である。典型的な連想照応の例は、*Il s'abrita sous un vieux tilleul. Le tronc était tout craquelé.* 「彼は菩提樹の古木の蔭で雨宿りした。幹はすっかりひび割れていた」のように、先行詞を含む文が単純過去形に、照応詞を含む文が半過去形に置かれているものが多い。本論文では、多くの作例をインフォーマント調査した結果に基づいて、連想照応が成立する最適条件を探っているが、その調査でも照応詞を含む文は半過去形が最も好まれることが明らかにされている。従来この点は、全体の中の部分にハイライトを当てるという、連想照応の持つクローズアップ効果との関連で論じられることが多かった。しかし時間という側面で捉えれば、上記の例で半過去形*était*は単純過去形*s'abrita*との同時性を表す。本論文では連想照応を、「万年筆」と「ペン先」のようにフレームに基づくステレオタイプによるもの、「村」と「教会」のように場所的關係に基づくもの、「切る」と「ナイフ」のように項關係に基づくもの、「小説」と「著者」のように機能的關係に基づくものに分類した上で、ステレオタイプ型と項關係型では、先行詞を含む文と照応詞を含む文に同時性がなく、別の時間に属する文であっても連想照応の容認度が高いが、場所的關係型と機能的關係型では同時性がないと容認度が低下することを明らかにしている。このことは、連想照応を語彙的なステレオタイプだけに基づいて分析することの限界を示しており、照応關係の場面依存性を浮き彫りにしている。しかしこのことは結果的に本論文が立脚する立場を、談話・認知的立場に近づけることにもなるため、さらに踏み込んだ考察が必要であろう。これは第四章で扱った「直後の受け直しのパラドックス」の問題についても言えることである。

本論文が明らかにしたもうひとつの点は、連想照応が多く語り(narrative)において出現し、またインフォーマント調査でも「小説の一部である」という註釈を加える

と容認度が向上するという点である。この事実は語りに特有の「視点の移動」が連想照応に深く関係していることを意味する。本論文ではこのことを、物語における視点理論で文芸批評家Genetteが提唱する「内的焦点化」と関連づけて「描写性」の問題として捉え直している。すなわち連想照応を含む文が、登場人物の視点に立って知覚した場面を表すと解釈できる環境を整えると、連想照応の容認度が高まることが観察できる。従来から「人間」と「身体部分」の間では連想照応が成立しないとされてきたが、本論文では「描写性」が高まると身体部分制約を解除する場合があることを示している。

このように本論文は、フランス語における連想照応についての考究を深めており、従来はフレームの働きが最重要視されてきたのに対して、語りに特有の視点移動や場面の同時性が重要な要因として働くことを明らかにした点で、従来の研究を前進させている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年6月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降